

## 第8課 わが民を慰めよ

### 【暗唱聖句】

「高い山に登れ。良い知らせをシオンに伝える者よ。力を振るって声をあげよ。良い知らせをエルサレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れるな。ユダの町々に告げよ。見よ、あなたたちの神」イザヤ 40:9

### 【日曜日・将来の慰め】

「慰めよ、わたしの民を慰めよと。あなたたちの神は言われる。エルサレムの心に語りかけ、彼女に呼びかけよ。苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われたと。罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けたと」イザヤ 40:1

「慰めよ」という言葉は、ヘブル語で「深く息を吸い込む」という意味があります。ゆったりと深呼吸もできないような状況から解放され、今、静かに深く深呼吸するように神様の臨在を感じ取ることができる状況へと救われるとの預言です。なぜか。神のユダに対する苦役の時はついに終わるからです。どんなに苦しい時を通らされたのとしても、それが終わる時がきます。「苦役」と訳された原語は「戦い」という意味です。「戦いが終わった」ということです。バビロンとの戦いが終わったということです。ここに語られているのは、抑圧されている民に語られる解放の福音です。それと共に、「咎は償われた」とあります。苦役を強いられたそもその原因は、神様から離れたことでした。だから、その罪が赦されることがなければ、苦役が終わることもないのです。

「エルサレムの心に語りかけ」よとあるように、心の耳を澄ませ、神の救いの声を聞くことが大切です。これまで神様は沈黙を続けられていました。それはまるで見捨てられてしまったかのようでした。

「シオンは言う。主はわたしを見捨てられた。わたしの主はわたしを忘れられた」イザヤ 49章14節  
しかし、ついに神様は沈黙を止め、口を開かれ、救いの時を告げられたのです。

神様はユダに対する刑罰を、アッシリアやバビロンに代行させました。そのアッシリアやバビロンも、高慢さのゆえに神様の裁きが下るのですが、ユダの裁きには明確な目的がありました。それは民が神様のもとに立ち返らせることでした。イザヤ書 7:17～38:6までに、アッシリア（人）という言葉は43回出てきますが、それ以降は1回しか出てきません。また後半はアッシリアの諸事件から1世紀以上も後のバビロン捕囚と解放、及びバビロンの終焉に焦点が移ります。

ところでイザヤ書 39章にバビロンの捕囚となることが告げられており、これが次の章へとつながっていくわけですが、面白いことにバビロン捕囚についての預言は、13・14・21章においてすでに何度か語られています。

**14:1「まことに、主はヤコブを憐れみ／再びイスラエルを選び／彼らの土地に置いてくださる…主が、あなたに負わせられた苦痛と悩みと厳しい労役から、あなたを解き放たれる日が来る。」イザヤ 14:1～3**

このようにイザヤ書は必ずしも時系列にきちんと書かれているわけではありません。神様はイザヤを通して、ユダに対する重大な預言を繰り返し語っておられるのがわかります。

### 【月曜日・臨在・御言葉・道備え】

民たちは、荒れすさんだ虚無の中に生きていました。すさんだ心はまさに「荒れ野」です。だから、イザヤは、「主のために、荒れ野に道を備え、神のために、荒れ地に広い道を通せ」（40:3）と命じているのです。このとき、慰めがやってきます。ここで重要なのは、自分のためではなく主のために道を備えよと言われていることです。主は私たちのもとに来たいのです。私たちに伝えたい言葉があるのです。私たちの心が荒れすさみ虚無になるのは、「主が来られる道」が荒れているからです。神様からの言葉が通る道が閉ざされているのです。主の通る道が備えられ、広くされるのでなければ、心の中はいつまでも不毛の荒野なままです。主が「呼びかける声」に耳を傾け、今まで自分のためにしか生きていなかった生き方から、主のために荒野に道を備え、荒地に「広い道を通す生き方、すなわち神様中心の生活を回復せよとの命じられているわけです。

では、主のために荒れ野を整えるためには、どうしたら良いのでしょうか。自分で凸凹の荒れ野を整えることはできません。バプテスマのヨハネは、自分を荒野で呼ばれる声だと言い、自分自身の働きをイザヤ書 40 章の預言に当てはめました。そして、彼は「悔い改めよ、神の国は近づいた」と宣言しました。主のために荒れ野を整えるには、悔い改めが必要です。主のもとに立ち返るといことです。その時、主は私たちの心の中から不純物を取り除いてくださいます。

#### 【火曜日・宣教の始まり】

「高い山に登れ。良い知らせをシオンに伝える者よ。力を振るって声をあげよ。良い知らせをエルサレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れるな…」 40:9

40:1 の「慰めよ」が、9 節では「良い知らせを伝えよ」に変わっています。深く息を吸い込み、生き返るような慰めの経験は、良い知らせ、福音を知ったときに起こるのです。三天使は高く大空から永遠の福音を述べ伝えましたが、空を飛べない人間はせめて高い山に登り、下に向かって一人でも多くの人に声が届くように力をふるって声を上げるのです。「高い山に登れ。良い知らせをシオンに伝える者よ。力を振るって声をあげよ」という命令形は、女性名名詞が使われています。その他の良い知らせを伝える声は、男性名詞で書かれています。このことは、バプテスマのヨハネが現れる前に、救い主の来臨をシメオンとアンナ、つまり男性と女性が告げ知らせたことと関係があるのかもしれませんが、女性ということでは、イエス様の復活を最初に伝えたも女性のマグダラのマリアでした。

#### 【水曜日・憐み深い創造主】

40 章 12 節からは、何の慰めも、良い知らせも語る事のない偶像に頼る愚かさを教えるために、主がヨブに問われたときのように、「海や天を測る者があろうか…主の企てを知らされる者があろうか…知識を与え、英知の道を知らせうる者があろうか」と、矢継ぎ早に問いかけ、40:18 では「お前たちは、神を誰に似せ、どのような像に仕立てようというのか」と言われました。そして、主が「地の基の置かれ」(40:21)、その「地を覆う大空の上の御座に座しておられる」(40:22) という、イスラエル民族にとって反論の余地のない議論を展開します。その上で、「目を高く上げ、誰が天の万象を創造したかを見よ」(40:26) と迫るのです。神様がすべてをご支配されていることを忘れてしまうと、40:27 にあるように、人々は、「わたしの道は主に隠されている。わたしの裁きは神に忘れられた」と言うようになるのです。

#### 【木曜日・偶像崇拝の問題点】

「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。あなたはいかなる像も造ってはならない」 出エジプト 20:3、4

十戒の最初の 2 つの教えは、他に神があってはならないということと、たとえそれが真の神様を対象としていたとしても、いかなる偶像も造ってはならないということでした。人間は生まれながらに何かにすがりたいという思いを持っているものです。そこで人間は神々を考えだし、偶像を造っては拝み、心のよりどころとしてきました。しかし、そのような偶像は、40:29 にあるように、「疲れた者に力を与え、勢いを失っている者に大きな力を与えられる」ことはできません。また、この世のものに頼ることも、それが偶像となってしまう危険性があります。この世のものは、一時の喜びや安らぎを与えるかもしれませんが、永遠ではなく、やはり疲れた者を完全に癒す力はありません。それができるのは、命の創造者なる神様だけです。イザヤ 40:31 にあるように、「主に望みをおく人は新たな力を得／驚のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れぬ」という、御言葉が真実であることを知るならば、神様はただお一人であることがよくわかることでしょう。